

連載⑤2 地域密着を進める
女子大学の人づくり
 宮城学院女子大学 長谷部 弘
 学長

女子大学が目指す「人づくり」というテーマのもと、今回は前回の宮城学院の「出発点」である宮城女学校設置時の話の続きとして、キリスト教の福音宣教と女子教育というミッションを携えて来日し、女学校の設立と運営に尽力されたプールボー女史を取り上げてみたいと思います。エリザベス・R・プールボ

ー女史(1854~1927)は、アメリカのペンシルバニア州サマーセット郡出身の方で、31歳の若さで仙台にやって来られました。彼女は、当時のアメリカのハイスクールを卒業した後、中学校や師範学校で教育実践をして来られた方だったようで、移民の国アメリカで、「ドイツ改革派教会」というドイツ人系の教派(デノミネーション)に属する教会の会員でした。「改革派」とは16世紀の宗教改革者カルヴァンのプロテスタント運動に源を置く欧州大陸系のキリスト教会です。アメリカのキリスト教会全体がそうだったのですが、当時この教派でも海外伝道熱が高まり、特に東アジアで初めて近代化を開始した日本へ宣教師を送ろうとする動きが活発となっていました。そんな中で、日本で福音宣教と女子教育のための働きに召命を覚えた彼女は、海外伝道局から日本へと派遣されたのです。東海岸に近いペンシルバニアを立ち、サンフランシスコまでの大陸鉄道の長旅と2週間にあたる太平洋航路の船旅を経て、1886年7月2日に、当時の日本最大の国際貿易港であった横浜へと到着した彼



21世紀の現在の私たちがすれば、セピア色のフィルタでしか見ることでしかない、あの「大草原の小さな家」のようなアメリカの伝統的ク

プールボー女史

女は、その月のうちに仙台での福音宣教と女子教育の働きを決断します。出国前の6月1日に伝道局のあるハリスバークの教会で行われた送別礼拝での「挨拶」の文章が残されています。その中で、彼女は、これから始まるうとする東洋の不思議な国での働きについての思いや願い、そして決意を端的に語っています。日本の地で福音を根付かせるためには「女性による女性のための働き」が不可欠であること、また日本の女性のために生涯を献げる女性として自分が求められ、それを自分は敬虔な信仰に基づいて召命として受け止めたということ、さらに、自分は改革派教会の女性たちに課せられた家庭における務めとして、真面目で正直な父親が子供を正義と義務の道へと導き、敬虔な母親が助言と祈りによって子供達を育てること、う役割分担が重要であること等々を熱く語っています。

リスチャン・ホームを理想とし、それが日本に根付くように、しっかりとした女子教育を行いたい、それがプールボー女史が来日するに際して抱

本鉄道会社の鉄道路線は開通していませんでしたので、横浜から石巻を経由して塩釜に至る海路を用いたようです。当時、仙台は東北地方の中核都市であり、県庁の置かれた行政都市であり、陸軍の拠点として東北鎮台が置かれた軍都であり、教育施設の設定が目指される学都でもありました。プールボー女史を迎える仙台市民の目線は、条約改正を目的とした欧化政策が文明開化の絶頂期を演出していた時代状況の中で、福音や女史教育という彼女の思いとは裏腹に、憧れの西洋文明や欧米の生活様式に向けられていた、というのが実相だったと思われまふ。それから7年間にわたる彼女の働きは、彼女の思いや願いと必ずしも折り合わない日本人社会との葛藤と共に展開されていったのでした。(続く)

長谷部 弘(はせべ・ひろし) 1955年生まれ。福島市出身。東北大学経済学部、経済学研究所修了後、同学部助手、教養部講師、国際文化研究科助教を経て、99年に経済学研究科教授。2021年定年退職し東北大学名誉教授。23年4月から宮城学院女子大学学長、専門は日本経済史、博士(経済学)